

The OSU-NU Japanese Linguistics and Pedagogy Workshop (第1回 オハイオ州立大学—名古屋大学日本語・日本語教育研究ワークショップ)

趣旨：本ワークショップはオハイオ州立大学（OSU）と名古屋大学の日本語・日本語教育研究者の研究・教育上の相互交流の活性化を目指して開催します。校内、学外のどなたもご自由にご参加ください。事前申し込みは不要です。

後援：平成 29 年度名古屋大学大学院人文学研究科研究プロジェクト経費

「日本語学・日本語教育学分野の教育研究の国際化・活性化プロジェクト」

問い合わせ：堀江薫(horie@lang.nagoya-u.ac.jp)

開催日時：2018年2月23日（金）午前9時半～午後3時半

開催場所：名古屋大学東山キャンパス全学教育北棟406室

<http://www.nagoya-u.ac.jp/access-map/>

交通案内：地下鉄名城線「名古屋大学駅」1番出口徒歩5分

9:30-9:35 開催の辞（堀江薫，名古屋大学）

9:35-10:15 秋田喜美（名古屋大学）

「類像性の感覚固有性：空間移動を表す日本語オノマトペを例に」（発表言語：日本語）

(Modality-specificity of iconicity: The case of motion ideophones in Japanese)

概要: This study examines the semantic variety and specificity of Japanese ideophones for spatial motion events to illustrate the modality-specificity of iconicity. As verbal icons, motion ideophones tend to depict dynamic (e.g., auditory, spatio-temporal) aspects of motion events. Suprasegmental features that elaborate ideophonic depiction also exhibit this tendency. In contrast, manual icons, such as iconic gestures and sign language, are more expressive of visual information, both dynamic and static. Motion events, which involve various concepts, allow us to observe this semiotic contrast clearly and reinforce the modality-specific view of iconicity.

10:15-10:40 薛婧宇 (Xue Jingyu) (名古屋大学大学院)

「日本語の複合動詞「V1-間違える」と中国語の“V1-错”，“错-V1”の対照研究」

概要：本研究は失敗を表す日本語の複合動詞「V1-間違える」と中国語の“V1-錯”、“錯-V1”の違いを論じる。具体的に、コーパス調査による各表現のV1の違いを指摘するとともに、中国語の“V1-錯”と“錯-V1”の使い分け（“吃错了药”と“错吃了药”など）について考察する。その上で、日本語の「V1-間違える」と中国語の“V1-錯”、“錯-V1”の違いについて論じる。

10:40-11:05 張穎 (Zhang Ying) (オハイオ州立大学大学院)

「日米の高等教育機関における日本語教育-東北大学と OSU の対比を通して」

概要：本発表では、外国語としての日本語教育の一例として、米国のオハイオ州立大学のパーフォームドカルチャーアプローチを紹介する。特に東北大学で開講されている外国人留学生向けの「日本語特別課程」を第二言語としての日本語教育の一例とし、ペダゴジーの視座から両者を比較することで、それぞれの利点と今後の課題について考察したい。

11:05-11:45 林誠 (名古屋大学)

「修復の前置き (repair preface) としての「てゆうか」」

概要：本発表では、会話分析の観点から、「てゆうか」というフレーズが修復の前置き (repair preface) として用いられる事例を検討する。典型的な自己修復の事例では、何らかの不適切性を持つ表現 (トラブル源「X」) を適切な表現 (「Y」) に置き換えることで修復の実行がなされるが、「てゆうか」で前置きされた自己修復では、「トラブル源」とされた表現「X」を完全に不適切なものとは位置付けず、「Y」をあくまでも better alternative として提示する。本発表では、そうしたプラクティスを用いることで、参加者が相互行為上どのようなことを成し遂げているのかを探る。

11:45-12:10 Sally Jones (名古屋大学大学院)

“Semantic, syntactic and sequential ties in English conversation: Examining the appendor question” (発表言語：英語)

Abstract: This presentation will examine a practice of other-initiated repair called the ‘appendor question’. These questions are a semantic and syntactic extension of the turn containing the trouble and are produced by a different speaker. For instance:

1 A: They make miserable coffee.

2 → B: Across the street?

Previous research, however, has been limited regarding its ties to the sequential context. Using conversation analysis, 135 hours of naturally-occurring interaction in English were examined and uncovered approximately 130 instances of appendor questions. It was found that appendor questions can be used to address problems in understanding that arise from sequential incoherency.

12:10-13:10 休憩

13:10-13:50 杉村泰 (名古屋大学)

「日本語の現場指示コソアの選択意識について」

概要：日本語学習者は、日本人なら映画のスクリーンを見ている場面で「この人は誰ですか」と言うところを「あの人は誰ですか」と言ったり、日本人ならすぐ横にいる相手の顔を見て「その口紅はきれいだね」と言うところを「この口紅はきれいだね」と言ったりする。このような例を挙げながら、日本語母語話者と日本語学習者（中国人、韓国人）の指示詞の選択基準の違いについて考える。

14:00-15:30 (招待講演) 中山峰治先生 (オハイオ州立大学東アジア言語・文学学部)

「日本語学、心理言語学、そして日本語教育 -日本語名詞・再帰代名詞の第2言語習得研究の成果に基づいて-」

概要：日本語文法研究で得られた知識を、心理言語学的に実証研究し、脳のメカニズムを理解する。一方、海外での日本語教育にも反映させる。ここでは3つの具体例として、日本語学習者の応答、物語展開における名詞の使い方、第2、第3言語としての日本語の再帰代名詞解釈の研究結果を紹介し、言語の生得的なもの、第2言語習得における母語の役割に言及し、これらで得られたものをいかに言語教育に反映させるかを考えたい。

15:30-15:35 終了の挨拶